

安楽寺だより

令和2年 秋 No.39号

愚かなる身こそなかなか うれしけれ

弥陀の誓いに あうと思えば (良寛)

ようやく秋の気配もおとずれ、朝晩は、肌寒く感じるようになってまいりましたが、皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。

新型コロナウイルス感染またはその防止のため、いつもと違う日常を送られていることでしょう、つらい事もあるでしょうが、どうぞめげずにがんばりましょう。

もうすぐ報恩講の季節でもあります。ご法話で、阿弥陀さまのお話しの中で、よく耳にする言葉があります。「念仏」や「浄土」に並んで浄土真宗では「信心」という言葉がよく使われます。

「聖人一流の御勸化のおもむきは、

信心をもって本とせられ候ふ」

蓮如上人が書かれた御文章の中ではなんと、276回も「信心」という言葉をお使いになられています

また、宗祖親鸞聖人は、ご消息といわれるお手紙の中に69回、「教行信証」というお聖教の中では64回ほど「信心」という言葉を使われています。

書物の長さの違いはありますが、源信和尚の往生要集、法然上人の選択集には10回程度しか記述がないことを思えば、親鸞聖人以降、「信心」は、重要で大切にされた言葉なのかがわかります。

ちなみに「信仰」という言葉をつかわれる方がいますが、親鸞聖人も蓮如上人もほぼ使われてはいません。

さて、「信心」とは、よんで字のごとく「信じる心」なのですが、この「信じる」には、

2通りあると思われま

す
ひとつは、信じなければいけないとか疑わないように信じるという信じ方で、信じようとする者もたいへん力がいらいます。信じるのに努力が必要になるのです

もう一方、同じ信じる行為でも、信じるしかない心という信じ方です

ここに、サルの子と猫の子の違いのたとえがあります

どちらも親を必要とするこどもで、移動するときに、サルの子は親に置いていかれまいと必死に親にしがみつきます。力いっぱいしがみつかないと振り落とされるという疑いや不安があるからです。



それとは逆に猫の子は、どうでしょう
親猫は口に子猫をくわえて運びます。くわえられたら、身動きが取れません。後はすべてを任せのみです。何の疑いもなくそのまま任せるのです



仏さまの救いを「信じる」ということは、子ザルのように振り落とされないか疑いと不安のなかで一生懸命につかまるのではなく、子猫のようになんの疑いもなく力を抜いて、むこうからつかまえられる信心です。

阿弥陀さまにまかせていく、それが、親鸞聖人、蓮如上人が私たちにお聞かせくださる

「如来よりたまわりたる信心」といわれる所以です。

芳英